

留学生のための物語日本史

第 8 話 平将門

「なぜ誰も来ぬのだ」

下総国（しもうさのくに）幸島郡北山（現在の茨城県坂東市）を背にした平将門は叫んだ。

「新皇陛下、兵は間もなく、いましばらく待てばきっと参上つかまつりまする」

部下の声が単なる気休めでしかないことは将門自身が最もよくわかっていた。関八州（かんはっしゅう）¹を手中に収めた「新皇」平将門の下に参集している兵は、約四〇〇騎しかいなかった。この場には将門の八〇〇〇騎の兵が集まる予定であった。それがまだ来なかったのである。

「どうしてこうなってしまったのであろうか」

将門にとって、この言葉は後悔からくるものではなかった。自分は常に正しいことをしていたという自負があった。周囲の悪人、特に、京都の朝廷に媚を売る悪人どもが、朝廷をだまして自分を不利に追い込んだのだ。「自分の本当の姿」を知っていれば、そしてその志を知れば、多くの兵は参集してくるはず。将門は、「思う」ではなく、そのように「確信」していたのであった。「どうして」は、当然に「悪人がどのような手段を使って自分たちを追い詰めたのか」ということなのである。

「新皇陛下、そのように申されても」

部下の兵は、兵が少なく追い詰められたというようなことを聞かれたのかと誤解した。他の兵が来ないのは、何も、遅れているばかりではない。やはり京都の朝廷に反旗を翻すことができず、将門のもとに来なかった兵も少なくないのだ。

「そもそも、今回の件は、興世王（おきよおう）が頼ってきたところから始まるのだ」

「御意にございます」

興世王とは桓武天皇の三男伊予親王の玄孫（やしやご）である。武蔵権守（むさしのごんのかみ）として武蔵介（むさしのすけ）源経基と共に赴任したが、源経基に嵌（は）められて一時謀反の疑いをかけられる。その時は謀反（むほん）の疑いなしと判断されるが、しかしその後、源経基の後任として正任国司百濟王貞連が赴任すると、興世王は国司と反目して平将門のところに身を寄せる。皇族であり、なおかつ同じ桓武天皇の系統である興世王を拒否できない平将門は、側近としてそのままとどめ置くことになる。そののち成り行き

¹ 関八州…江戸時代以前、関東八か国の総称。八か国とは、相模（さがみ）、武蔵（むさし）、安房（あわ）、上総（かずさ）、下総（しもうさ）、常陸（ひたち）、上野（こうずけ）、下野（しもつけ）。

から常陸国（ひたちのくに）の国府を占領した平将門に対し、「案内ヲ検スルニ、一國ヲ討テリト雖モ公ノ責メ輕カラジ。同ジク坂東ヲ虜掠シテ、暫ク氣色ヲ聞カム」という興世王は東国制覇を勧めるのである。その言葉を意気を感じた平将門は、下野国・上野国の国府を占領することになるのである。

幸島郡北山には、その興世王も姿を現していなかった。

「まあ、これから来る敵をすべて打ち破って、もう一度皆を集めればよいのか」

「御意でございます」

たった四〇〇騎の兵では、大和朝廷から追捕としてきた藤原秀郷（ふじわらのひでさと）・平貞盛の連合軍を打ち破ることは難しい。連合軍には、藤原為憲（ためのり）の軍隊も加わって三〇〇〇騎となって北山に迫っていた。

「新皇陛下、敵軍が迫っているようです」

「なるほど、山を背に兵を並べよ」

「はっ」

平将門は、「絶対に負けない」というような神話になっていた。全身鋼鉄のように固く、矢も通らないといわれたのである。四〇〇騎の兵は、将門の神話を信じていた。実際に、肌に触ったり矢を通してみたようなことではない。しかし、彼らの中には、将門は絶対に死なないというような宗教のような確信があった。そして将門の言うとおりにしていれば、絶対に負けるはずはないし、また、自分が死ぬはずもないと思っていた。いや、将門には神が宿っていると思っていた。その命令は、武神からの神託である。従わなければ罰が当たってしまうと信じていたのである。

「我は東国新皇平将門である」

将門は馬上で刀を挙げ大きな声を出した。

「おー」

四〇〇とはいえ、士気の高い軍の声は非常に大きい。

そもそも将門が「新皇」という称号を名乗り始めたのも巫女の神託によってであった。そもそも、京都の朝廷の方ばかり向いて、東国の人々のことを全く考えない、そのような京都からの貴族や国司は、東国の住民から嫌われていた。東国の住民は、一度も見たこともない京都の天皇のために年貢を取られ、京都の貴族のために使役（しえき）を行わなければならなかった。一向に良くならない東国の庶民を救うために、東国に新たな朝廷を立て、東国の民を救う。神々は、そのような平将門の理念を高く評価したのであろう。平将門に「新皇」の称号を与えたのである。

目の前には敵の軍が広がっていた。

「藤原秀郷・平貞盛の軍です」

その多さに、部下はたじろいだ。

「なんだ、あれだけか」

広がっている敵に、将門は全くたじろいだ表情もなく、自分の軍が数においても有利で

あった時と同じように言い放った。

「我こそは、朝廷におぼえめでたく関八州を平定し、平和を取り戻すためにやってきた倭藤太（たわらのとうた）・藤原秀郷（ひでさと）である。天皇の御代、この坂東の地に反乱を起こし、私的な争いから公的な国府の占領に及んで天皇の大きな徳を損ねる逆賊平将門を討伐しに参った。尋常に勝負せよ」

秀郷はそのように言って兵を進めた。しかし、名乗りを上げている間に連合軍の平貞盛が奇襲を仕掛けたのである。

「何を言う。我こそは、新皇平将門である。坂東の地の民のために」

将門が抜身の刀を高く掲げると、その刀の切っ先に日の光が宿って輝いた。そして平将門がその刀を大きく振りかぶって連合軍の方に振り下ろすと、刀に宿った日の光が連合軍の陣を切り裂いたのである。「光の矢」とともに、北山の上から暴風が吹きあれ、枝をならし、地のうなりは土塊を運んでいた。

奇襲のつもりで放った平貞盛軍の矢がすべて将門に届かず、連合軍の陣の方に降りかかった。

「藤原秀郷も、平貞盛も、戦の仕方も知らぬと見える。我の名乗りの間に矢を放つとは不届きものめが。皆の者、今だ。全軍突撃」

天慶三年（940年）二月一四日未申の刻（午後3時）、平将門と藤原秀郷の軍の戦いの火ぶたが切って落とされた。

将門の刀から発した「光の矢」で度肝を抜かれ、そして自分の放った矢が降りかかってくるという「将門戦法」を目の当たりにした連合軍の兵は、初めから及び腰であった。そこに、北山の上から釣瓶落としに馬に乗って一丸となって突撃してくる平将門軍四〇〇騎を前に、数で勝るとはいえ、連合軍は全く歯が立たなかった。

藤原秀郷の軍は、一回の突撃で八〇騎が討死してしまった。その姿とあまりの平将門軍の強さに恐れをなした連合軍の兵士は、一人抜け、二人走り去り、また将門の刃の前に倒れ、矢で射ぬかれて討死し、あっという間に二九〇〇騎がいなくなってしまった。

「何とか、何とかならぬのか」

藤原秀郷・平貞盛そして藤原為憲は、自分の側近や本陣の護衛をかき集め、そして逃げ遅れた兵を捕まえて何とか三〇〇の兵を集めた。しかし、平将門の軍はほとんど損害を出しておらず四〇〇騎のまま迫っていた。

「引け・引くのだ」

一番初めに奇襲攻撃をかけた平貞盛は、敵の中で途方に暮れ、とにかく護衛を連れながら逃げるしかないと決めたのである。

「鬼神のごときとはこのことか」

藤原秀郷は、宇都宮大明神で授かった霊剣を抜くと、混乱の中その場に立ち止まり、大きく天に向けて霊剣を振りかざした。

「宇都宮大明神・神々に物申す。天皇の御代に逆賊を撃たんが為、我に力を授けたまえ。

力なくば、この命を早々に奪うがよい」

藤原秀郷が言い放った後、風は急に風向きを変え、連合軍にとって順風になったのである。

「風向きが変わった」

将門は、少々首をかしげた。今までそのようなことはなかった。自分には必ず武神が力を貸してくれ、関八州東国の民のために自分が独立し、新たな王朝を作ることを神が望んでいると思っていた。しかし、この戦いになって初めて「風」が逆風になったのである。

「陣に戻るぞ」

「はっ」

四〇〇騎の兵は、平将門とほとんど一心同体であった。将門が戻ると言えば、当然に、その手足のように、将門について、将門を囲むように馬を寄せ周囲を固めて今まで敵を蹴散らした地を戻った。

「なぜ、なぜ風向きが変わったのだ。天は我々を見放したのか」

この時、風向きが変わったことを敏感に察知したのが、老練な藤原秀郷であった。

「将門は四〇〇で三〇〇〇を蹴散らした。今、風を味方につければ、三〇〇でも将門に勝てぬはずはない。全軍突撃」

あの将門の突撃でも屈しなかった精鋭三〇〇は、一丸となって陣を引いてゆく将門に襲い掛かった。しかし、将門も戦巧者である。再度襲いかかると見せて、また引いてということを繰り返し、なかなか秀郷の軍に隙を与えない。

「死ぬ気で突撃する。ついて参れ」

秀郷は自身が先頭に立って突進した。しかし、将門を囲んでいる騎馬隊の壁を突破することはできなかった。秀郷は、それまで使っていた刀が折れてしまっていた。

「ええええい。ままよ。将門覚悟」

秀郷は、戦には使わなかった霊剣を抜き突進した。

その時である。

「あっ」

一陣の風が秀郷と将門の間を吹き抜けた。その瞬間、将門の乗った馬は棒立ちになり、そして、そのまま倒れたのである。矢が、鋼鉄で矢を通さないといわれた将門の眉間を射抜いた。いや、誰も矢が刺さった将門を見ていない。風が将門の眉間を貫き、そして、将門の命を奪ったのである。

『将門記』の記述には「このとき歴然と天罰があつて、馬は風のように飛ぶ歩みを忘れ、人は梨老のような戦いの術を失った。新皇は目に見えない神鏑（しんてき）に当たり、託鹿（たくろ）の野で戦った蚩尤（しゅう）のように地に滅んだ」と書いてある。矢が刺さっていないので、人々は「神鏑」といった。馬と一緒に倒れた新皇・平将門は、そのまま起き上がることはなかった。

後に、反乱の首謀者は追討軍の前に次々と滅ぼされた。平将門を失った将門軍はあつけ

なく瓦解（がかい）²したのである。根源であった皇族興世王も二月一九日上総で藤原公雅に討たれた。

将門は、「正しいことをした」と、最後まで考えていた。そのため、亡くなって、獄門にかけられた後も東国の庶民が気になり、また、朝廷に媚を売って収奪の限りを尽くす悪人を滅ぼすため、怨霊となって世をただし、その首は武蔵の国まで戻ってきたという。

² 瓦解…一部の瓦のくずれ落ちることが屋根全体に及ぶように、一部の乱れから、組織全体がこわれること。

第9話 源頼朝と北条政子

「源朝臣頼朝（みなもとのあそんよりとも）を征夷大將軍に任ずる」

建久三年（1192年）七月、鎌倉に勅使（ちやくし）が持ってきたふみにそのように書かれている。やっと希望が通ったとの安堵の笑みが、源頼朝・北条政子夫婦の顔に自然に浮かんだ。

以前後白河法皇と会談し権大納言・右近衛大将に任じられた。しかし、頼朝は翌日その任を辞退している。

「こんなのになら就任したら、ずっと京都にいななければならないではないか。判官義経の例を見ればわかるとおり、いや、平清盛入道ですら、京都の華やかさに惑わされ、武士としての本分を忘れてしまう。権大納言・右近衛大将になれば、帝の参集に応じて京都にいななければならない。それでは、結局判官や入道のように身を滅ぼすことになるだろう」

頼朝はこう言って、あっさりと官職を放棄したのである。内心は、後白河法皇は、そのように京都の官職を使い、武士を仲違いさせて操る術に長けている。頼朝は、もともと京都のそのような政治的な術に長けていないために、それを恐れたということになる。

「ではなぜ一度お受けになったのですか」

政子は、その時を思い出してそう言った。

「一度部門の官職を受けなければ、全国に追捕使（ついぶし）³を置くことができないであろう。もともと義経・行家の搜索・逮捕の目的で保持していた日本国総追捕使・総地頭の地位をそのままにするためには、一度朝廷の武士の官職を受けなければならない。今では諸国守護権というようだが、その内容を手に収めてから、官職を辞退した。それだけである」

「それはよくお考えになりましたね。しかし、もう夷敵などいないではありませんか」

政子は、頼朝に向かって少々強い口調で言った。現在、武士の棟梁である頼朝に向かって、命令口調でモノを言えるのは妻の政子だけであった。政子は、頼朝が伊豆に流されてきた時から知っている。そのために、頼朝の好きなことも嫌いなことも、そして本音の部分もすべて知り尽くしていた。「糟糠（そうこう）⁴の妻」という言い方があるが、まさに、そのような妻の在り方こそ、貴族の世界との最も大きな違いではなかっただろうか。

「もともと源家は將軍の家柄なんだ。平将門を打ち破った平貞盛の平家の出羽国で俘囚（ふしゅう）と秋田城司（あきたじょうのすけ）を打ち破った平良文（たいらのよしふみ）の平家、同じく平将門を打ち破った藤原秀郷の嫡流の藤原家、そして、押収を鎮圧した源頼義・義家の流れの源氏、いずれもが鎮守府將軍となって武士の棟梁との資格を持っている。多くの武士はその血筋に武神が宿ると信じている。わが頼義流の源氏は、八幡大菩薩が宿るとされているではないか。その四の武家を統括する『大將軍』にならないといけない。

³ 追捕使…賊を取り締まることを任務とする地方官の一つ。

⁴ 糟糠の妻…貧しいときから苦勞を共にしてきた妻。

そして夷敵を討つだけではなく出さないように、武士の政治も行わなければならぬのだ」

「夷敵が出てくる。何をおっしゃっているのですか」

政子は、そのように言って笑い出した。

「そう笑うものではない。夷敵は我々の心の中にいるものだ。木曾義仲も判官義経も、いずれも平家を追捕した英雄だ。しかし、同時にその功績に驕り自分を見失い、心の中の夷敵に蝕（むしば）まれて身を滅ぼしてしまう。そうならないように、われら武士は武士が見てゆかなければならない。私はそのような世の中をつくらなければならないのだ」

政子は、自分の意表を突いた言葉が出てきて驚いた。朝廷ではなく、武士が武士のための政府をつくるというのである。それは夢のようでもあり、また、朝廷との対立を生むものでもあった。しかし、夫である頼朝は本気である。この時に政子が感じた感覚が、後に承久の乱で「尼將軍」といわれるような演説につながるのだ。

「後白河法皇は本当に困ったものである。將軍の上の大將軍を望んだら、征東大將軍という称号を与えようとしてきおったわ」

「それでよいではないですか。鎌倉は東国なのですし」

政子は、頼朝の頭の中にある武士の世の中の高層での対立を少しでも和らげるのはそれが最も良いのではないかと思った。

「征東大將軍というのは、あの木曾義仲の称号だ。この他にも『惣管（そうかん）』『上將軍（じょうそうぐん）』という称号もあったが、『惣管』は平宗盛の称号だ。いずれも滅ぼされて凶例となっている。そのような称号をもらえば、われら源家も滅ぼされてしまう。これでは意味がない。『上將軍』というのは常勝軍ということで縁起が良いのであるが、前例がないのでなかなかたいへんであろう。源家は、もともと東北の役を平定した実績がある武士の棟梁。それならば坂上田村麻呂が就任した征夷大將軍でよいのではないか。後白河法皇にそのように申し上げておいたのだ」

「しかし、なぜ今頃そのような官職が来るのでしょうか」

頼朝が後白河法皇と面談したのは文治五年（1189年）のことだ。もう三年も前になる。

「後白河法皇が薨去（こうきょ）したからであろう。後白河法皇は、常に武士を自分の手のうちで転がすことしか考えておらなんだ。それなのに、自分の手元に来ることなく遠く東国でなにをしているかわからないような武士の集団を制度的に認めることはしなかったであろう。自分の意のままに動くようなものでなければ、官職を与えない。それが後白河法皇の考え方だ。まったく、大天狗が死んだら物事が見えるようになった。朝廷もそんなところであろう」

征夷大將軍に任ずるとの書面が来る半年前、後白河法皇は薨去していた。現在の年齢にして享年四六歳と伝えられている。全てを自分の意のままに動かすということ、そして先例などにとらわれない自由な発想を持つ人物であった。「今様狂い」と称されるほどの遊び人であり、「文にあらず、武にもあらず、能もなく、芸もなし」と同母兄・崇徳上皇に酷評されていた。この変動する時代の中で、先例にとらわれ、何事も決められないままとりの

ない京都の世界で、このような性格があったがために、薨去するまで実権を握り続けることができたともされている。後白河法皇と対立する九条兼実「法皇は度量が広く慈悲深い人柄であられた。仏教に帰依された様子は、そのために国を滅ぼした梁の武帝以上であり、ただ延喜・天曆の古きよき政治の風が失われたのは残念である。いまご逝去の報に接し、天下はみな悲しんでいるが、朝夕法皇の徳に慣れ、法皇の恩によって名利を得た輩はなおさらである」と評し、また、頼朝自身は武士を使い捨てにする後白河法皇に対して「日本国第一の大天狗」と評していた。

「要するに、朝廷もやっと、私がかこ鎌倉の地で武士の棟梁として武士のための政治を行うことを承認した、そういうことではないか。これからだな」

「はい。ようけお気張りください」

政子は言った。

「そりゃそうだ。叔父も弟もみな殺して武士の世の中のために頑張ってきたのだ。平家のように武士が貴族の下につく時代ではなく、武士が武士のために世の中をつくる。それは我々が行わなければならない。そうでなければ、弟も浮かばれることはあるまい」

「判官殿ですか」

「おうよ。奥州では藤原清衡が独自の政府を作っておったそうだ。だから追捕使を出しても義経を匿い続けることができたのだ。そのようなことが頻繁に起きては、問題が多くなる。まずは武士が一つとなって、そのうえ主従関係を強化して、戦が起きないようにしなければならない」

「そうですね。そもそもあなたは戦が下手ですからね」

「そう言うな。そんなことを言うのは政子だけだぞ」

「他人の前では言いませぬ。でも、以仁王（もちひとおう）から宣旨をもらって挙兵しても、すぐに石橋山で戦って、しばらくの間は山の中に隠れていたではありませんか」

「あれは兵が集まらぬうちに戦ったからだ」

頼朝は、意地悪な表情で昔話をする政子に、少々怒った表情で言った。もちろん目は昔を懐かしむかのように笑っていた。

「そもそも伊豆韮山にある山木兼隆の目代屋敷（もくだいやしき）を襲撃したのも、私の父北条時政でしょ。石橋山の跡は蛇やトカゲを食べて山の中をさまよって、命からがら真鶴岬から船で安房国へ脱出したではありませんか」

「そんなこともあったなあ」

「だって、あなたはその後に平定に来た平維盛と富士川で対峙した時も、相手が水鳥に驚いて勝手に逃げただけだって。私は富士川まで入っていませんがそんなことを言っていましたよ。そのあとの戦いはすべて判官殿と蒲冠者（かばのかじゃ）殿（源範頼）にお任せになられて、あなたはずっと鎌倉からお出にならなかったではありませんか」

「私は戦は嫌いなのだ。その代り戦わずに、関東のすべてを平定したではないか。私は心を攻めるのが上手なのだよ」

「はい。承っております。これからは戦ではなく、その心を攻める方法で、武士の朝廷をおつくりになるのですね」

政子は、これ以上言うと頼朝が本当に怒り出すので、この辺で話題を切り替えた。そのへんの呼吸は長年連れ添った夫婦である。

「武士の朝廷というのはいかがなものかなあ」

「そうですね」

「武士は陣を常に敷く。陣には必ず幕を張るではないか。国の庁が『国府』であるならば、武士は、どこでもいつでも戦と政ができるように『幕府』とするのはいかがであろうか」

「それは良いお考え。戦ではなく、そのようなことをお考えになるのは、やはり頼朝さまが一番でございます」

「政子に褒められると照れるなあ」

頼朝は、この後鎌倉に幕府を開き、朝廷とは別に武士の世の中を作ることになる。そしてその武士の世の中は、鎌倉幕府・室町幕府・江戸幕府と続き明治維新まで続くのである。その基礎は、このようにして頼朝によって作られた。そして頼朝が急逝したのち、政子はその志を継いで尼將軍となり、幕府を、今まで夫頼朝を支えてきたように支え続けた。その夫婦の和が、武士の世の中の基礎になっていたのであることを知る人は、今では少なくなっただのかもしれない。